「他者」と「神国思想」についての一考察

馬　　雲　雷*

はじめに

神国とは、神が開き、守護している国。また、皇孫が君臨する神聖な国である[1]。この定義には①神々の加護の下にある国と、②天照大神の神孫たる天皇の統治する国という意味の二面がある[2]。①は広い意味での神国に対して、②は狭い意味での神国と言ってもよかろう。もし①に従えば、日本だけではなく、古代のエジプト、ローマ教皇を元首とするバチカン、ギリシア神話に出てくる国々も「神国」と称することができよう。しかし、もし②を加えて限定すれば、神国の範囲は大幅に縮小し、まさに北畠親房が『神皇正統記』の冒頭で「大日本者神国也。天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を伝給ふ。我国のみ此事あり。異朝には其たぐひなし。此故に神国といふなり」[3]（序論）と撰したように、ここでの神国は日本のみを指していることとなる。本文で論じる「神国」も日本のみを指している。日本の神国思想がどのように生まれたのか、どのように発展してきたのか、将来どう変わっていくのか、など一連の問題については、日本の歴史、原始信仰、中国の道教、神仏習合との関係をはじめとする様々な面から論述されてきた。中国においても、日本においても、「日本の神国思想」に関する著作や論文も枚挙に暇がない。

しかし、周知のように、国は従来あったものではなく、一定の地域内に住む人間集団が、生命の安全と生活の保障を求めて、また外敵の侵入を防ぐために形成した政治的共同社会である[4]。丸山真男も『日本政治思想史研究』で国民主義の形成を論述する時、外からの刺激が大きな役割を果たしたと指摘した[5]。勿論、神国思想は丸山氏のいわゆる国民主義、または国の形成とは異なっているが、そのメカニズムは似ているところがあると思われる。田村円澄の言葉を借りれば、「日本の神国思想は、究極において政治思想である」[6]。それに、『世界大百科事典』にも、神国思想が「政治的統一が進み、他国・他民族への意識が生まれてくると、日本を他国よりもすぐれた国とする主張の拠り所となった」[7]と明確に書いてあった。

簡単に言えば、外的要素としての「他者」[8]は日本の神国思想と大きく関わっていることは言うまでもない。神国思想を研究する学者は、だれも例外なく「他者」に多かれ少なかれ触れてきた。しかし、これは決して神国思想の発展・変化する過程において、「他者」の位置づけや役割が言わずして自明ということを意味しない。「他者」はいったいどんな存在としてあったのか、どんな役割を果たしていたのか、「他者」の果たした役割から何が窺えるのか、といった問題はとうていはっきりされていないように思われる。それがゆえに、筆者は日本の神国思想の誕生と変容を個人的な意見を加えながら概観した上で、「他者」に焦点をあててその位置づけや役割を整理し、「他者」の果たした役割から神国思想の行方をも考えてみたい。

＊北京外国語大学北京日本学研究センター・院生

一、神国思想の登場と変容

思想は体系的な意識内容として、言うに及ばず、様々な要因によって構築され、種々な変化を遂げてきたものである。勿論、日本の神国思想も例外ではなく、内外の要因に左右され、ほかの思想と融合しながら、様々な変容が生じてきた。本文は神国思想における「他者」の位置づけと役割を論じようとするので、「他者」と深く関わっている諸段階を概観してみたい。

１、対等外交と神国思想の「発芽」

日本の神国思想はいつ生まれてきたのかという問題について、一般的には720年に撰された『日本書紀』の「神功皇后紀」に「神国」という言葉が初見されることをその起点とする。しかし、種子が土を破って地上に出た前に、既に発芽したのと同じで、「神国」が文字として現れる前に、こういう思想も既にどこかに孕まれていたにちがいない。

日本に関する古書を遡って繙くと、607年に、小野妹子が隋に渡り、隋の煬帝に国書を呈し、「日出処天子至書日没処天子無恙云々」[9]と当時煬帝の不満を招いたと『隋書』に記されている。『日本書紀』によれば、翌年の608年に、聖徳太子が再び中国に国書を送り、今回「東天皇敬白西皇帝」という言い方を用いた[10]。津田左右吉によると、「天皇」という言葉は中国の道教から誕生し、天上世界の最高神を指す「天皇大帝」に由来する語である[11]。実は「天皇」という名称の使用は天武・持統朝に始まったが、「天皇対皇帝」、「日出対日没」、「東対西」といった対照的な言葉からは日本の地位的、または時間的、空間的な優位性を強調しようとする意欲が容易に看破される。

『日本書紀』は720年に成立した日本の最初の正史である。正史と言えども、その編纂する目的は、対内に天皇統治の正統性を主張することと、対外に国勢を示すことである。また、その8年前に編纂された『古事記』も他者を意識しながら、中国の天命思想に基づいて、天地初発、神世七代、天照大神、天孫降臨などの物語を記述し、天皇が神であることを証拠立てようとする書物である。この両書によると、天皇は天照大神の子孫で、現人神として日本を支配する存在に位置づけられた。その後、天皇の実権はさておき、「神の下剋上」の一時期もあったが、天皇は基本的に神と同一視され、天皇の統治する国も即ち神国といわれる。こうして見れば、「最高神・天皇大帝」に由来する「天皇」という称号にすでに神国思想が発芽したのではなかろうかと考えられる。

前述したように、「天皇対皇帝」は日本が対外に国勢を示す一つの対語であった。実は「東対西」、「日出処対日没処」という用語からも「他者」と対等的な地位を求めようとする、或いは少なくとも名称上においては「他者」を乗り越えようとする意欲が読み取れる。また、後世において「日本は神国」という命題を論じようとする時、よく「万国之東頭而朝阳始照之地，阳气发生之最初也」[12]と言って「東」を、「日天子」、「日神」、「日嗣」、「日輪」などを説いて「日」をその典拠とした。また、豊臣秀吉や徳川家康は自分を神格化するためにも、「日輪の子」、「東照権現」と「日」や「東」を強調した。勿論、これは「東」、「日」、「天皇」をキーワードにして、人為的且つ意識的に「神国物語」を作り出したのかもしれないが、この「かもしれない」にも「他者」を乗り越えようとする「神国思想」が潜んでいた可能性は皆無と言えない。

総じて言えば、「他者」の存在は日本の神国思想の発芽とは切れない関わりを持っていると思われる。「他者」と対等的な地位を求めようとする、或いは「他者」を乗り越えようとする意欲、少なくとも意識的に選び出した上述の「言葉」にすでに神国思想が発芽していたと考えられる。

2、元日戦争と神国思想の「肥大」

中世になると、政治体制は以前と比べて大きく異なってきた。国家の権力は天皇（院）、将軍、寺社に分割所有されるようになり、天皇の権威は墜落しつつあったが、仏寺神社の相論や新旧仏教の対立を背景に、「神国日本」は却って頻繁に説かれて、特に元日戦争の時において、神国思想は急速的な膨張を迎えた。

13世紀、蒙古のフビライ・ハンが日本の入貢を求め、鎌倉幕府に断られた故、二度に渡って日本に攻め入った。文永11年、元軍側は約2万8000人の兵士を率いて、対馬や博多に上陸し、特別な集団戦法で日本軍を苦戦に陥らせたが、暴風雨に遭遇し、兵船は大きな打撃を受けた。弘安4年、南宋を滅ぼし中国全土を支配した元朝は再び10万の大軍を日本に送ったが、再度失敗を喫した。この文永・弘安の役と呼ばれる二度の戦いは元軍の失敗で終わりを告げたが、日本に絶大な影響を及ぼした。一つは鎌倉幕府の倒壊を速め、もう一つは日本の神国思想の急膨張に拍車をかけた。

元日戦争後、日本の神国思想が急速に膨張した原因には、世に「吹き荒れ」ていた「神風」がまず考えられる。当時の記載によると、元軍は戦法にも優れて、兵士の数も日本のを遥かに超えたもので、もし「神風」の助けがなければ、日本は勝てるわけがなかったと多くの人に信じられていた。日本軍を苦戦から救い出したのはほかでもなく、まさに全国寺社の異国降伏祈祷によるこの「神風」である。

ちなみに、「神風」という概念が水面に浮上したのはおそらく元日戦争の時であったが、実は「神国思想」が発芽した段階にすでに存在していたと思われる。例えば、『日本書紀』の「垂仁天皇紀」（巻第六）、「神功皇后紀」（巻第九）に「神風」が記載されるほか、「神国」が見られる部分にも、「時、飛廉起風、陽侯挙浪、海中大魚、悉浮扶船。則大風順吹、帆舶随波、不労櫓楫、便到新羅。時、随船潮浪遠逮国中、即知、天神地祇悉助歟。」と記され、神風という二文字は明確に書かれなかったが、「天神地祇悉助」による「風」だから、「神風」の意味が違いなく読み取れる。おそらく、島国である日本にとって、風特に台風は一番自然（神）の凄まじい威力を感じさせるものだったのではないかと推測できよう。

次は、小が大を負かすという「不思議」も重要な一因として見逃してはいけない。上述したように、一方は南宋を滅ぼし中国全土を支配した元朝、もう一方は辺地にある粟のような日本、山王神道の教理書『耀天記』の話で言えば、「日本国は小国の中でも特に小国」[13]であり、その実力は比べものにならないほどの差がある。特に、平安時代の後期から、仏法が衰える末法思想と三国世界観による辺土思想が広がり、人々を不安に陥らせていた。この末法辺土という考え方は神国思想が「養分」を汲み取る源となる一方、神国への確信は当時の人々にとって末法辺土を克服する自己救済の手段ともなった。

特に、元日戦争によって得られたこの「不思議」は「我が国、辺地粟散の界といへども、神国たるに依りて、惣じては七千余座の神、殊には三十番神、朝家を守奉り給ふ。」[14]というような記述を確信させ、または「此明器我朝の宝として、神代の始より人皇の今に至まで取伝御座事、誠に小国也といへ共、三国に超過せる吾朝、神国の不思議は是也。」[15]と書いてあるように、「神国」や「明器」によるその「不思議」は元の三国世界観をも越えさせた。

総じて言えば、中世は日本の神国思想が肥大化する時であった。寺社の対立、新仏教の排撃のほか、元日戦争も非常に重要な要因となって、「神風思想」や「神国思想」は急速な膨張を迎えてきた。

3、東亜共栄と神国思想の「暴走」

元日戦争後、日本の神国思想は風船のように様々な目的を持っている人に大きく膨らまされた。

日本は「神国思想」を精神の核にして、自国を「万邦無比」の国と吹聴して、度々境を超えて周辺に出兵した。19世紀、日本は産業革命が進むにつれて、物質上の発達が思想上の膨張と絡み合い、ついに対外侵略に乗り出した。特に、甲午中日戦争と日露戦争における日本側の勝利、即ち小国が大国を負かした「不思議」によって、神国思想はさらに膨張し、「東亜共栄」という表看板を掲げながらアジアの諸民族に大きな損害を加えた恐ろしいものに変わった。

大東亜共栄圏とは、太平洋戦争期において、日本の対アジア侵略戦争を合理化するために唱えられた標語である。1930年代、日本は「日満一体」を打ち立て、その後「東亜新秩序」と名を変え、中国への全面侵略戦争を開始した。1940年代初頭に「大東亜共栄圏」は松岡洋右によって初めて提出され、東南アジア諸国を侵略の対象とした。大東亜共栄圏の本質は自国を無上な神国と見なし、「他者」である中国および東南アジア諸民族を日本の支配下に置き、アジア盟主の地位を保つことである。

この時、神国を標榜する軍歌、神国を鼓吹する文学作品がたくさん作られたほか、天照大神を祀る神社もアジア各地に建てられ、今でも瀋陽、長春などの地に残されている。その目的は言うまでもなく、「国内」に対して、神国思想による天皇の絶対的な権威を強調し、現人神である天皇のために、命を捨てても惜しくないことを唱えると共に、「他者」に対して、「万邦無比」の神国思想を教え込むことによって、「他者」の抵抗を和らげることである。神国思想は「日本軍人」を奮い立たせる道具となる一方、天皇権威と絡み合い、「他者」に害を加える軍国主義の兵器ともなった。

こういう変質した神国思想は「他者」を侵略するものとして、アジア諸国に莫大な災難をもたらしたほか、自国をも失敗の深淵に導いた。

4、人間宣言と神国思想の「崩壊」

1945年8月14日に日本はポツダム宣言を受諾し、翌日天皇はラジオを通じて敗戦を宣告して、太平洋戦争が終結した。日本の降伏に伴い、マッカーサーを最高司令官とするGHQが設置され、日本の革命的な民主化が進められた。教育民主化の一環として、GHQ民間情報教育局のヘンダーソンと学習院教員ブライスが中心となって、天皇に神格を否定させる構想を立てた。翌年の1月１日に、昭和天皇は詔書を発表し、天皇を現御神とするのは架空の観念であると述べ、自らの神性を否定した。また、GHQから、憲法改正を考慮すべき旨の指示を受けて、11月3日に国民主権、基本的人権の尊重、平和主義を基本原理とする日本国憲法を公布した。

ここで神国の定義を改めてみよう。神国とは①神々の加護の下にある国という意味と、②天照大神の神孫たる天皇の統治する国。この定義によれば、神国と称する条件は以下の3点を満たさないといけない。①神々の加護があるので、即ち負けることはないこと。②天皇は天照大神の孫であるので、即ち神様であること。③日本の統治権は天皇にあること。しかし、日本の敗戦はまず条件①を壊し、日本を神々の加護の下でいつまでも負けない夢から目覚めさせた。人間宣言は条件②を破り、天皇が自ら神格を否定した。国民主権は条件③を破壊し、日本の統治権は天皇ではなく、日本の国民にあることを示した。こうして、GHQをはじめとする「他者」の圧力によって、神国思想は少なくとも形式上では崩壊した。

二、「他者」の位置づけと役割

以上、「他者」に焦点を当てながら、神国思想の発芽、肥大、変質、崩壊の四段階を概観した。神国思想が発芽した段階においては、「他者」の刺激は大きな要因と考えられるが、中世において、「神国思想」はまさに風船のように大きく膨張し、

特に近代に入ってから、さらに軍国主義と絡み合って、「他者」に絶大な被害をもたらし、最後に「他者」に「針」をもって刺されて凹んできた。「他者」は神国思想といつも関わっているが、その位置づけと役割は一定不変のものではなく、時によっては大きく異なっていることが明らかである。

1、主体と客体として存在する「他者」

まず、「他者」は神国思想の変化している過程において、時には「主体」として、時には「客体」として、多くの時には「主体」と「客体」の二面を持っているように存在したと考えられる。すこし具体的に言うと、神国思想が芽を出す時、「他国」は刺激を与えた「主体」として存在する一方、神国思想を通して、乗り越えられようとする「客体」でもあると言えよう。そして、「神国思想」が急膨張する中世においては、「他者」は作用をしかける「主体」でありながら、「神国思想」も「他者」の思想から役立つ「養分」を抉り出しながら「他者」の思想を克服した。しかし、「神国思想」の急膨張につれて、「神国思想」は軍国主義と結ばれ、戦前・戦中において、誰も疑問を差し込むことの許されない「歴史的な真実」そのものになった[16]。「他者」はその「主体性」を失い、完全に「神国思想」が害を加える「客体」になった。その後、被害を受けながら抵抗しつつある「他者」はようやくその「主体性」を挽回し、「神国思想」を壊した「主体」の地位に戻ってきた。こうしてみれば、「神国思想」が膨張すればするほど、「他者」の主体性が喪失していく傾向が見られる。特に「神国思想」が「万邦無比」や「宇宙至高」といった絶対中心主義になった時、「他者」も侵略・統治する「客体」に転じたと言ってもよかろう。

2、証拠立てとしての「他者」

次に、注意していただきたいのは、「神国」という二文字が初めて現れてきた『日本書紀』「神功皇后紀」に、「新羅王遙望、以爲、非常之兵、將滅己國。讐焉失志、乃今醒之曰：吾聞、東有神國、謂日本。亦有聖王、謂天皇。必其國之神兵也。豈可舉兵以距乎。」と書いて、「他者」の口を借りたことである。また、後世の仮託とされる『倭姫命世記』にも「吾聞く、大日本国は神国なり、神明の加被に依りて、国家の安全を得、国家の尊崇に依りて、神明の霊威を増す」[17]と記述されて、同じく「他者」の口を借りている。「他者」に「日本者神国也」と語らせる理由としては、「神国思想」を正当化する手段として使われていることが容易に考えられる。そのほか、『日本三代実録』貞観十一年十二月十四日条にも「わが日本の朝は所謂神明の国也。神明の護り賜わば何の兵寇が近く来るべきや」[18]と記され、「所謂」が使われるこの文も「日本者神国也」といった文と違って、自己規定の言い方を若干避けるように考えられる。このようにみれば、おそらく神国思想は発芽する前段階においては、どうしても自己規定ができないので、「他者」を利用するのが、「日本者神国也」を真命題のように見せかけるには最も簡単且つ有効な手段に違いなかろう。哲学上では、個人の得る「自己の感覚」は、他者による認知、すなわち鏡としての他者に映った自己によると言われるように、ここにおいては、「他者」も自己証明の手段として役割を果たしたと考えられる。勿論、後の段階になると、「他者」の口を借りる形はあまり見られないが、「他者」の思想から何かをえぐり出し、「外的」権威を借りて、「日本神国」という命題を飾り立てるのは多く見られ、即位灌頂、神仏習合にもこの意図が含まれていると言えよう。

3、理論補強としての「他者」

上述したように、神国思想は前段階において、自己を証明するには「他者」の口を借りたこともあるが、時が経ち、特に仏教や儒教などへの理解が深まるにつれて、こういう「他者」の思想から自分に役立つものを抉り出し、「神国」理論を補

強することも多く見られる。

例えば、末法辺土思想が広がる平安後期から、人々の関心は現世から彼岸に向き始めた。こういう背景を前提に、立場の相対的に弱い神は仏の本地垂迹に位置づけられることによって、末法辺土にある人々の救済者となった。言い換えれば、末法辺土という仏教的なコスモロジーを利用することによって、「神国思想」は理論的に補強され、自分の格上げを実現した。

同じく、両界曼荼羅、印度を入れて中国を相対化した三国世界観、独鈷の形をしている日本国の地形なども巧みに説かれることによって、神仏習合のもとに、日本は「両部不二」の国、即ち三国の中で最も優れた神国に仕立て上げられた。

総じて言えば、「他者」は、時には神国思想を打倒した主体、時には「神国思想」から被害を受ける「客体」、時には「主体」、「客体」を兼ねる存在となっている。「他者」の位置づけの変化によって、その役割も変わってきたが、神国思想が発生および変化した時に、「他者」の口を利用したり、「他者」の思想から役立つものを抉り出したりしてきたことは明らかである。

三、「他者」と神国思想の行方

2000年、首相森喜郎は公の場で「日本は天皇を中心とする神の国」と発言した。森発言に対する賛否双方の立場からの激しい反応は、神国思想が多くの日本人にとっていまだに過去のものとなっていないことを再認識させるものであった[19]。戦後、「神武景気」、「岩戸景気」、「伊弉諾景気」と名付けられた日本の好景気は共に「記紀神話」に由来する名である。また、家庭電化ブームとして、テレビ・洗濯機・冷蔵庫も「神国」と関わる「三種の神器」と命名された。これらの名称にはどうも「神国思想」の影が潜んでいると思われるほか、今なお「世界皇化」を鼓吹する団体は複数見られる。神国思想とは何か、神国思想は今存在しているのかという質問に対して、人によってまちまちであるが、この答えには神国思想の行方への見方も含まれていると考えられる。

しかし、一点見逃してはいけないのは、日本の神国思想の崩壊が自発的ではなく、「他者」の圧力によって壊されたことである。喩えて言えば、木は根から腐って死んでしまわなければ、風に吹かれて倒れたり、火に焼かれてボロボロになったりしても、いつか根から芽生える可能性がないとは言えない。言い換えると、「他者」による崩壊は消滅とイコールではない。実は、近年の靖国神社参拝の問題や歴史教科書の問題にも「神国思想」と「他者」の圧力、または「神国思想」を頑固に抱える日本人と「神国思想」の行方を心配して平和を愛する日本人の相撲、すなわち力の駆け引きが窺えると言えよう。

むすび

以上、筆者は日本の神国思想について「他者」に焦点を当てながら簡単に考察してきた。神国思想はその形成・変化する過程においては「他者」と大いに関係している。神国思想が発芽した段階においては、「他者」の刺激は要因の一つではあったが、神国思想が肥大化するにつれて、「他者」より優れ、さらに「他者」を征服するという思想にまでなった。特に20世紀に入って、そういう思想が軍国主義と絡み合って、対外侵略の理論に変質し、大東亜共栄圏の名義で、「他者」に大きな災難をもたらした。敗戦後、「他者」の圧力によって、日本の神国思想はとうとう崩壊してしまった。

この過程においては、「他者」は「主体」、「客体」或いは「主体」、「客体」を兼ねる存在として変化を見せている。「他者」の地位の変化によって、その役割も変わってきた。また、神国思想の膨張する度合いは「他者」の「主体」としての地位が占める割合と逆の関係を示しており、「他者」が「客体」として存在する時、侵略対象のほか、道

具として利用されてきたことも見逃してはいけない。また、神国思想の崩壊は自発的ではなく、「他者」の圧力によるという視点から考えれば、歴史の悲劇が再び繰り返されないように、「神国思想」の行方にも注意を払わないといけない。これは「他者」のためではなく、「自身」のためでもある。

注

1　松村明『大辞林（第三版）』、三省堂、1999年、P.1289。
2　相賀徹夫『日本大百科全書12』、小学館、1988年、P.539。
3　北畠親房著、岩佐正校注『神皇正統記』、岩波書店、1975年。
4　相賀徹夫『日本大百科全書9』、小学館、1988年、P.362。
5　丸山真男『日本政治思想史研究』、東京大学出版会、1983年、P.321。
6　田村円澄「神国思想の系譜」、『史淵』、1958年、P.56。
7　下中直也『世界大百科事典14』、平凡社、1988年、P.318。
8　「他者」一般的には「自分以外の、ほかのもの」を指すが、哲学上においては、「自己に対する何ものか」をも指す。ここでは、「神国」と自称する日本に対して、ほかの国、即ち「他国」を指すこととする。
9　魏徴『隋書』、中華書局、2005年、P.1825。
10　佐藤弘夫『神国日本』、筑摩書房、2006年、P.33。
11　佐藤弘夫『概説日本思想史』、ミネルヴァ書房、2005年、P.20。
12　平田篤胤『古道大意』、改造社、1944年、P.132。
13　佐藤弘夫『神国日本』、筑摩書房、2006年、P.116。
14　芳賀矢一校訂『保元物語』、富山房、1910年、PP.28～29。
15　『太平記（巻二十七）』、有朋堂文庫、1927年、P.201。
16　佐藤弘夫『神国日本』、筑摩書房、2006年、P.9。
17　『倭姫命世記』、神道大系編纂会、1993年、P.97、原漢文。
18　『国史大系（第四巻）』、経済雑誌社、1897年、P.299、原漢文。
19　佐藤弘夫『神国日本』、筑摩書房、2006年、P.8。

参考文献：

[1] 佐藤弘夫『神国日本』、筑摩書房. 2006年
[2] 佐藤弘夫『概説日本思想史』、ミネルヴァ書房. 2005年
[3] 和辻哲郎『日本倫理思想史』、岩波書店. 2011年
[4] 丸山真男『日本政治思想史研究』、東京大学出版会. 1983年
[5] 姚宝猷『日本“神国思想”的形成及其影响』、南開日本研究. 2017年